

旭川文学資料友の会 第35号
友の会通信

発行・NPO法人 旭川文学資料友の会
〒070-0044
旭川市常磐公園 旭川市常磐館内
電話 0166-22-3334
<https://www.abs-tononokai.jp/>
印刷・株式会社あいわプリント

漢字の読み方

旭川文学資料館館長

三原 一仁

漢字の読み方はなかなか難しいものです。難しい漢字というわけでもないのに、さてと思うこともあります。

旭川第七師団はかつてシチシダンとよばれました。ナナ師団ではなくシチ師団。永山武四郎が初代師団長に任命された際に、明治天皇がナナではなくシチとよんだことからシチシダンが正式な呼称になったともいわれますが確たる証拠はありません。ましてナナというべきところを明治天皇がシチと言い間違えたというに至っては俗説にもすぎます。

そこで、「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十」というこの漢数字をなんと読む

かということを整理しておきましょう。

音読みすれば「いち、に、さん、し、ご、ろく、しち、はち、きゅう、じゅう」だし、和読みすれば「ひ、ふ、み、よ、いつ、む、なな、や、この、とお」でしょう。ですから「ひとつ、ふたつ、みつ、よつつ」であり「いつつ、むつつ、ななつつ、やつつ」であって、四つが「シツ」や七つが「シチツ」ではないわけです。

旭川でも札幌でもそうですが、四条はヨジョウで七条はナナジョウで不思議はない。ところが京都では四条はシジョウだし七条はシチジョウという。もうおわかりのとおり京都での読みの方が整理されていますね。明治天皇は京都にもいたわけで、そういう読み方をするのが自然なわけです。七条はシチジョウであり七師団はシチシダンとよんだのです。

漢字の読みには、訓読みとよばれる和読みと中国由来の音読みとがあります。漢字に對

して意味の近い和語を寄せたのが訓読み、現地の発音に寄せたのが音読みです。この現地の発音というのも実は一筋縄ではいきません。

現代でもそうであるように外来語あるいはカタカナ言葉は随時登場し、消えゆくものもあれば、日本語として定着するものもあります。漢語も同じで、随時伝来してなかには日本語として定着したものもありました。

漢字は文字一字ずつが伝来するわけはなく、文章(あたりまえですが漢文や漢詩あるいは経文)として伝えられて、そのなかから漢語熟語として日本語に定着していったのです。ですからいつの時代に伝来した文章の漢語かによって発音は時代を映すわけです。漢の時代なら漢音、唐の時代なら唐音、宋や明代なら宋音とか明音ということになる。三国志の時代の呉から伝わったのなら呉音といって古い仏教用語の読みはこれが基本になります。一つの漢字の音読みが何種類もあるのはそういう事情によるわけです。

漢字の読みというのはいろいろとおもしろいのですが、ただ日本語としての熟語になると、湯桶(ゆとう)読みだの重箱(ジュウバコ)読みだのといってまたまた難しそうですね。

二十五年記念誌発行を終えて

旭川文学資料館館長

東 延 江

記念誌をまとめるに当たりつくづく反省させられたのは、せめて十五年誌をまとめておくべきだったという事だった。

十五年前なら菅野浩・佐藤比左良・澤栗修二等発足からかわっていた人たちが元気に記憶を引き出して心をひとつにまとめていただろう。

二十五年という文学資料友の会、そして文学資料館の足跡を残すのは残された者の責務だと取りかかったが、私にとつては後世に残し必ずや資料として旭川の文学史となるであろうと手掛けたのは「旭川文学史年表」資料館所蔵の旭川で発行された文芸誌、詩誌、歌誌、俳誌、柳誌の記録等々根気のいる作業を明石、出雲、五十嵐さんが黙々とやってくれた。

今回一年近い歳月を記念誌のために次の人たちがかわってくれた。

キヤップに三原一仁館長(年表、雑誌目録等、私の下手な手書き文の打ち込み作業他全体の目くばせ)、あいわプリント宮崎広美(本づくりのアドバイス等)、黒田忠(原稿、絵画、色紙、短冊の写真)、沓澤章俊(研究者、関係者等の原稿依頼、連絡)、出雲章子、五十嵐あつ子(所蔵雑誌等の一覧)、明石幸子(直筆原

稿)、東は三原館長のところで書いた様な仕事で、皆が早くから資料整理作業を黙々としてくれた月日があつたおかげでそれなりに順調に進めることが出来た。

この記念誌を受け取った一人からうれしい手紙が届いた。

たった一冊しか所蔵していなかった雑誌が載っていて、自分がかかわっていて、自分も持っていなかったので何十年ぶりかでは非見せてもらいに行きたいと。

又、手に取った人たちから「いいものを作ってくれたね」という言葉を受けたのは何よりもかわつたスタッフへの大きな花束だと嬉しかった。

もうひとつ黙々と「ふだんぎ」を発行し続けてきた岡田勝美さんが受け取ってすぐ手紙を下された。

入院中ということで心配していたが、私たちが旭川の文学者の一人として頁を飾ったことは間違いでなかった。病気に負けずにもう少し私たちを見守ってほしい文学者である。

岡 田 勝 美 (97歳)

東 延江様

「文縁」「旭川のゆかりの文学」、私にまで下さつて恐縮しております。さきにお便りを頂きました時、私入院中お返事も書けずお許し下さい。昨年二回、今年一回と入院し、ただ横になって看護師に叱られる生活をしておりました。

今やっと解放されて家にいますが介護機具

を10コほど置いたり建てたりしてそれに慎重につかまり乍ら家の中、トイレ、洗面所、台所、寝台を移動して生きておりますが、時に手をすべらせ倒れこんで、倒れてはもう起きあがれず一時間以上もがいて世話してくれる外出中の娘が帰つて来てベッドにひきあげてもらいます。そんなみじめな生活をしております。97歳になりました。

本の中で私ごときが文学関係の一人として書き加えて下さったこと全く恥ずかしいです。私二十代に「風土」をはじめ、小説も二三書いたものだが、私が小説書きの能力のないのを思いしり文学はそれであきらめ、労働者文学者を結集しその力で世の中を変えたいと編集者として生きる決意をしておりましたから、「風土」も「ふだんぎ」もその事に徹して書く人を集め結束しようとなつてまいりました。佐藤喜一先生には一番可愛がられ、いろいろな文学者と引きあわせてくれました。この本の中の何人かと直接会話し話も聞きました。この本の中の何人かが残っています。作品がよければ書いた人間がどんな人か考える必要はないのか、今もってわかりません。すぐれた作品を書き、変な人間を何人もみてきましたので。

いずれにせよ、この本に私を入れて下さり、恥ずかしいですが、やはりうれしいです。佐藤先生は不思議な人格者でした。私は付け人みたいに一緒に動いていろいろ学びました。

この本感激です。大変なものをお作りになりましたね。

2025・6・20

記念誌「文縁」

図録「旭川ゆかりの文学」の

発刊に寄せて

黒田 忠

今年は旭川文学資料友の会が創立25周年をむかえました。これまで会を支えてくれた会員各位や関係者の皆様に心から敬意を表します。当会の記念事業として取り組んできた記念誌「文縁」、図録「旭川ゆかりの文学」が完成し出版されました。微力ながら編集に携わる事が出来たことは望外の喜びです。私は主に資料の写真撮影に取り組みました。最初のうちは十分な撮影機材もなくどうなることやと危惧しましたが、何とか撮り終えることができました。支給されたSD(SDHC)カード(写真のデータを記録・復元する記録媒体のこと)は32GB(ギガバイト)情報量の大きさの単位)で、撮影枚数は約8000枚に及びました。最初は自分の影が写りこんだり、照度が足りないなど失敗続きでしたが、撮影するための小さなスタジオが完成してから失敗が少なくなりました。自分の影

が写りこまないようにするために脚立を使用し、照明も2方向から媒体を照らすようにしました。脚立の階段は3段くらいのもので、1枚の写真を撮るたびに上り下りするので、1日作業すると結構なエネルギー消費につながりダイエット効果もあった?：

記念誌「文縁」では「文学資料展・企画展の記録」のパンフレットの写真を撮影しました。私が企画展の展示作業のお手伝いをさせていただくようになったのは二〇二一年五月の「木野工『旭川今昔ばなし』直筆原稿展」からだったので、第一回「旭川文学資料展」二〇〇一年から今までの歴史を刻んできたパンフレットを目にして、本当に旭川文学資料館にはお宝が詰まっているなど実感することができました。何よりも自慢なのは、これらのパンフレットを作製したのが学芸員の杵澤さんやボランティアの人たちの手によるものだということです。

公立の大きな文学館等ではほとんどはプロのグラフィックデザイナーに依頼して作成していると思うのですが、当館の場合は自前で作成しているのです。もちろん印刷は業者に依頼しています。創館以来ボランティアの皆さんが展示やキャプションを手作りしてきたという伝統を受け継いで運営しているという一例です。図録「旭川ゆかりの文学」では、

文学資料館所蔵の色紙、短冊、直筆原稿、写真資料などの撮影をしました。色紙、短冊では著名な文学者や画家の作品に直接触れることができました。「大雪山の北修」と言われた高橋北修の色紙は図録の表紙を飾る絵として選ばれました。その他、関兵衛、朝倉力男、畦地梅太郎、一原有徳、佐藤忠良、田辺三重松、外山卯三郎、難波田龍起、丸木俊、村山陽一など貴重な色紙の数々。誰がどのような経緯で所蔵し伝えてきたのか、それだけで一つの物語が語られるような貴重な色紙です。短冊、直筆原稿についても同じような思いを抱きました。所蔵生原稿の一覧も作成しましたが、旭川文学資料館は宝の山です。これからも企画展などを通じて、これらのお宝を市民のかたにご覧いただける機会を設けていきたいと思ひます。



祝 旭川文学資料友の会

25周年

旭川文学資料友の会会員

橋 爪 裕 子

常磐公園入り口に建つ常磐館に、旭川文学資料館はある。旭川にゆかりのある文学資料が多く展示されている。その中でひととき目を惹くのは小熊秀雄賞に関する展示だ。小熊秀雄は第二次世界大戦に向かう抑圧された時代にあつて、その詩や絵画などを通じて自由や理想を問い続けた。小熊はその創作活動を旭川新聞社に勤務していた二十代前半に開始した。一九六八年に旭川文化団体協議会が主催して始まった「小熊秀雄賞」は、第41回(二〇〇八年)からは小熊秀雄賞市民実行委員会の主催となり、第59回二〇二五年度の小熊賞公募が始まっている。旭川文学資料館にはこれまでの小熊秀雄賞受賞者全員のプロフィールとその詩集が紹介されている。

今年五月、小熊秀雄没後85年そして小熊と親交が深かった詩人今野大力没後90年の記念誌『いま、小熊秀雄・今野大力』が発行された。旭川が誇る二人の詩人を巡るエッセイな

どがまとめられている。旭川文学記念館裏の常磐公園に面した所には、小熊秀雄と今野大力の記念碑がそれぞれを見守るように建っている。

くしくも今年は旭川文学資料友の会25周年にもあたり、この六月に文学資料館図録『旭川ゆかりの文学』と記念誌『文縁 25年の歩み』が発行された。こんなにも多くの文学を愛する人々が旭川で活躍していたんだと、あらためて深く感動した。ぜひ旭川文学資料館を訪ねて、旭川ゆかりの文学者たちの作品を実際に手に取り読んでほしい。そして作者たちの想いを感じてほしい。

旭川文学資料館は旭川の誇りであり、文学に少しでも関わる人々を導いてくれる光だと感じている。



『いま、小熊秀雄・今野大力』
小熊秀雄没後85年・今野大力没後90年
2025(令和7)年5月24日
小熊秀雄賞市民実行委員会編集発行
定価1,200円(税込)



25周年記念誌『文縁』と旭川文学資料館図録『旭川ゆかりの文学』
2025(令和7)年6月19日 旭川文学資料友の会編集発行
(どちらも有料で頒布しています。ご希望の方は当会までお問い合わせください)

「企画展」

「小学校の校歌展 Ⅲ」を

終えて

二〇二五年二月四日～四月二十六日

沓澤 章 俊

旭川市内の小学校校歌とその作詞者等を紹介する企画展の第三弾が終了しました。

二〇二三年から毎年開催しましたので、この第三弾で現在開校している市内の全小学校校歌を紹介したことになります。今回は閉校になった六校も含めました。

「小学校の校歌展」ⅠⅡⅢで紹介した校歌は計五十六校歌になります。

この校歌展を開催しようと展示部会で決めたのは、旭川大学（現旭川市立大学）名誉教授の竹中英泰先生が、校歌を研究している旭川出身の須田珠生さんという方がいると教えてくださったからです。

また、当館には文学資料は勿論のこと学校関係資料も所蔵していますので、詩人や歌人でもあった校歌の作詞者に焦点をあて、シリーズものとして開催すれば、来館者の方々に興味を持っていただけるのではないかと思います。ということで、展示作業に入ったのでした。しかし、どうしてもプロフィールの分からなかった作詞者もいて、須田先生からいろいろご教示をうけ、詳しく展示することができた次第です。

観覧された方々からは、校歌を歌った想い

出や、小学校時代のお話などを聴き、時代の違いはあれ、聴いている自分も懐かしい気持ちになりました。そして、その校歌の作詞者がこの地域の、あるいは全国の詩人や歌人であることに驚いていた方も少なくありませんでした。

記念講演会の講師を務めてくださった須田先生は、広島市生まれ。五歳より旭川市で過ごし、北海道旭川東高等学校卒業後、二〇一九年京都大学大学院人間・環境学研究博士後期課程修了、京都大学博士（人間・環境学）、日本学術振興会特別研究員（PD）などを経て、現在、小樽商科大学商学部准教授を務めておられます。「校歌の誕生」という研究書も書かれており、毎回の講演会は盛況で、どれも大変興味深い内容でした。

一回目の演題は「校歌その軌跡」。明治以来現在まで、校歌を作ることを定めた法令が存在しないことを知り、驚きました。歴史的な視点から、校歌がいつ生まれ、どのように広がっていったのかを、具体的な例をあげながら説明されました。

二回目は「校歌の変遷―戦前・戦後―」。校歌の歌詞や曲調の変化を、戦前と戦後で比較して考察され、とても興味深いことでした。

三回目は「校歌―起源と展開」。一回目、二回目の講演内容の概略を説明され、計三回の校歌展で取り上げた旭川の小学校校歌の作詞者や作曲者の傾向を表にして詳細に取り上げてくださり、この「校歌展」シリーズの展示内容のまとめにもなっていて、とても有難かったです。今回の「小学校の校歌展」で取り上げた五十六校歌のなかで、一番多く作詞し

たのは詩人の坂本富貴雄で十一校歌、続いて詩人の入江好之の八校歌でした。

そして最近の動向として、日本語・英語・韓国語の三か国語の校歌や、学校作成のプロモーションビデオ付きのレゲエ風の校歌も制定されていることを知り驚きました。

最後に紹介されたのは「外ではけっしてうたえなかつた校歌」。岡山県立邑久高等学校新良田教室の校歌です。この教室は、ハンセン病療養所である長島愛生園内の入居者が通える唯一の高校だったので、ハンセン病患者への差別により、島（園）の外では歌うことができなかったのです。当時歌えなかつた校歌を八十年代と思われるOBの方がピアノ伴奏と共にステージで歌う姿が紹介され、思わず胸奥から込み上げてくるものがありました。

講演を聴く数週間前、岩波文庫で昨年復刊された詩集『いのちの芽』（大江満雄編）を偶然読み、この病についての歴史的背景等に再度思い及んでいたところだったからです。

付言すると、大江満雄は旭川ゆかりの詩人小熊秀雄と交流があり、小熊は第一詩集の自序に「『小熊は偉大な自然人的間抜け者である』といった言葉が私をいちばん納得させた評言であつた、」と書いており、実は、これは大江の評言なのです。

末尾になります。講師の須田先生をはじめ、アドバイザーをいただいた竹中先生、そしてなによりも、この企画展と講演会に足を運んでくださった方々にこの場をかりて、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

観覧者 ノートより

■旭川東高校漫画・アニメ研究部

「旭東空想展」感想

旭東空想展きました〜??

元旭東文芸部(69期)しろたです〜(PN

小麦粉)

漫研さんにはいろいろとお世話になったので展示みて感慨深いです。みなさんががんばってくださいね!!

2024・7・13

資料館のボランティアで来た時に見させていただきました!

僕もマンガが好きなんですけど中・高校と漫研なかったのが皆さんがうらやましいです!好きなマンガは「バクマン」です!

2024・7・22

旭東空想展に来ました。とても良かったです。

2024・7・23

隣の部活(旭東漫研)の者です。みんなすごいなと思いました!

2024・7・31

10年以上前に旭東漫研に所属していました。今も部が残っていて、活動している事が嬉しかったです。思い出がよみがえる展示をありがとうございます。2024・8・3

末広図書館でチラシを見て、今回展示を見に来ました!!

私も漫画やイラストが大好きです。高校のときには透明水彩でイラストを描いて美術の大会に出すなどしていました。そのときの楽しかった気持ちを思い出します。これからも創作活動をたのしんでください!応援しています。

追記…チラシの方々の絵、本当に引き込まれます。すっかりファンになっちゃいました!おうえんしてます。

8・21

旭東空想展に来ました。この展示を企画してくれた文学資料館のみなさまに感謝したいです。私は漫研部員です。部員たちの作品が、このような形で皆様の目に触れる機会をいただけてとても嬉しいです!是非ゆつくり楽しんでください。

漫研部副部長 8・22

内容は素晴らしいかったです。身体に障がある為建物のバリアフリー化を望みます。(特に階段…)

2024・9・4

東高の人、方々の努力がすさまじい。涙出ます。

2024・9・4

親友の絵を拝見しに旭東空想展に来ました!!個人的にテンションがあがるものばかりでした!!2024の部誌のせいさくかていが見れて、所持している身としては、感激です!

これからも一ファンとして応援させていただきます。皆様のご活躍、切に願っております!!

一般通過ファンのえんびふらいより

アニメは詳しくないです。何故、人は夢を求めるのか?その手段は多岐に渡るでしょうね。自分の世界観を、大切にできたら、そう考えさせていただきました。

2024・9・7

親友に誘われて楽しそうだったので見に来ました。他の学校の部活動の内容とか実際にやっていることを知れた良い機会だったなと思います。東高の漫研の皆さんの活動の一

部と作品を見られて良かったです。そして私は漫研の部員のファンです。また皆さまのイラストが見られる機会がある事を楽しみにしています。

2024・9・7

元旭東の者です。漫研には入っていませんでしたがとても気になっていた部活だったので、活動内容や過去の部誌などが見れて楽しかったです。

9・12

藤田さんから初めてのサンデーに作品が載ったときに雑誌を部室に贈っていただいた頃の世代の者です。(部室が漫研と同じでした)展示見られてよかったです。

9・13

東高の漫研にいました。私のころは部員が大変少なく、存在が危ぶまれていたので、ずっと続いていてうれしく思います。

9・22

面白かったです!

思春期を漫画に助けられました。旭川出身、在住の者です。この様な活動を知ることができ、大変うれしく思います!来れて良かった!ガンバレ!!

校歌大事だと思えます♪

■「山岳文学の系譜展」感想

森山病院ロビーでの展示も見えました。文学資料館の展示とも、すばらしい。

11・28

なつかしい山々の写真、どれも輝いています。ずっと残っていて欲しい、大事にしたいものです。有難うございます。山友にも一声かけたいです。

11・29

天人閣の昔の値段等、面白かった。

11・29

会員さんのページ

読書と音楽と私の人生

船 引 恵 理

時々私は、苦勞知らずのお嬢様と間違えられます。おそらく、好きなことを自由に楽しんでいるように見えるからでしょう。しかも、その好きなことが、読書とフルート演奏だということが、それを後押ししているのかもしれない。

しかし、現実はお嬢様とは程遠い環境で育ちました。本に興味を持った小学三年生のころ、大好きだった赤川次郎の小説を買うことができず、毎週町の図書館へ通っていました。小学五年生からは音楽にも興味を持ち、音楽クラブでトロンボーンやチューバを吹き始めました。中学一年生で吹奏楽部に入り、フルートを手にしました。もちろん、学校の備品の楽器です。ちよつとメッキがはがれていましたが、音を奏でることが楽しくてたまりませんでした。

この二つの趣味、読書と音楽は、一見まったく別のもののように思われがちですが、実

は共通点があります。それは、言葉や音で「何かを伝えられる」という点です。目には見えない情景や感情を表現し、たくさんの人に伝えることができる、美しく、そして不思議な力を持った手段だと思います。しかも、受け取る側によって感じ方が異なり、それぞれが自由に思い描くことができるという、おもしろい特性があります。さらに、送り手としても受け手としても楽しめるのです。

このようなことから、言葉と音に夢中だった私ですが、高校に入ってから、読書も音楽も自由に楽しめない環境になりました。衛生看護科の高校に進学し、寮生活が始まったのです。

高校には吹奏楽部は無く、近くに図書館もありませんでした。日々、専門書とにらめっこです。卒業後は専攻科に進学し、看護師国家試験の勉強とアルバイトの両立で精一杯でした。この五年間は、人生の中で最も楽しめなかった時期だったと思います。

そのような中、唯一の楽しみだったのが祖母から届く手紙でした。季節の挨拶から始まり、旧字体の漢字が並ぶ文章。その中には「幸せがおとずれます様に」という言葉と一緒に、押し花になった四葉のクローバーが入っていたこともありました。女学校を卒業していた祖母の、知性と品性を感じる手紙は、私にとっては何より文学作品のようでした。

ちよつどその頃、「かみふらの女性史」の出版が決まり、祖母が執筆した文章が掲載され

ることになりました。そこに私の事も書かれていると知り、とても嬉しい気持ちになったのを今でも覚えていています。

あれから時が流れ、今は子育ても一段落して、看護教員という好きな仕事を続けながら、吹奏楽団でフルートを、バンドでは電子サックスを吹いています。職場では職権(?)を活かして様々な本や論文を読ませてもらい、休みの日には文学資料館へ行き、一人の時間を満喫しています。

以上、読書と音楽と私の人生のお話でした。



ライブイベントにて 向って右端 船引さん
2024年 旭川. Cafe Konii

資料館だより

受贈資料(敬称略)

(二〇二五・三〜二〇二五・七)

旭川市中央図書館

那須敦志『知ってほしいこ
な旭川』・三原 一仁
詩誌「惺」多数・倉地 智也
「解釈」七十一号・岸 広昭
菅季治『語られざる真実』他・岸 美千代
金平茂紀『テレビニュースは
終わらない』他

「新郷土たかす」六十三号

・植西富士子
小路幸也『花咲小路三丁目の
すばるちゃん』他・黒田 忠
会報「ななかまど」四十五号

東京旭川会

・坂本 研・坂本 緑
俳誌「白魚火」令和六年四月
号(坂本タカ女追悼)

ときわ短歌会

歌誌「ときわ短歌」令和七
年四月号、六月号・古家 昌伸
詩誌「饗宴」九十七号・辰巳奈優美
俳誌「ピリカ」三十一〜三十
四号

本田初美句集『芭露街道』

・中村 洋一
「赤い実のふあんクラブ会報
集」二十号他那須 敦志
LP盤レコード「北鎮精鋭凱
旋歌」(小池榮寿作詞)・川原 潤
川原潤作豆本・川嶋 均
『生活図画事件―最近の研究
から』(「歴史評論」八九九号
抜刷)・山内みゆき
詩誌「蒼原」一〇九号・柴田 望
詩誌「フラジャイル」二十三
号他・平間 順一
前川勲随筆集多数・東 延江
道内詩誌多数・かぎろひ詩社
歌誌「かぎろひ」令和七年
五月号、七月号・富岡 悦子
詩誌「午前」二十七号・天草 季紅
「よて」十七号・TOLTA代表 河野聡子
『遠くから来た新しい友だち』・網谷 厚子
詩誌「万河・Bangai」二十三
号・佐相 憲一
詩誌「指名手配」十一号、「小
熊秀雄協会会報」三十六、三
十七号・海老子川雄介
旭橋を語る会通信「ぶりっじ」
一号他・(有)アトリエサード
「ナイトランド・クオータリ
ー」三十九号・北海道教育大学旭川校近代文学ゼミナール
ゼミナール誌「燈火」十号・ナナカマド同人会
文芸誌「ナナカマド」五十五号・ときわ木川柳会
川柳句集『あゆみ』四十号・為井 恵子
「文芸美瑛」三三三・小熊秀雄賞市民実行委員会
『いま、小熊秀雄・今野大力』・澤田 展人
「逍遙通信」十号その他、各地文学館、記念館館報、各地文
芸誌、歌誌、俳誌、詩誌等たくさんさんの御寄贈
を賜りました。心よりお礼申し上げます。

友の会人事動向(敬称略)

【新入会員】

室崎 喬之、福田 洋子、峯本 信子

【現在会員数】(七月三十一日現在)

一七三名(うち法人 七件)

編集後記

過日(六月十九日)友の会二十五周年
記念祝賀会が皆様のおかげで盛会に催さ
れました。記念誌・図録の完成を受け皆
様にたくさんのお言葉もいた
だきました。

二〇〇一年の研究会(現 友の会)発足、
二〇一〇年、NPO承認当時の会員の皆
さんの思いについては過去の友の会通信
でも触れました。

発足当時の故・相川正志会長の「昔を
残し 今を残し 未来に続ける、重要な
仕事を通じて旭川の文化の啓蒙と発展に
寄与することを誓う」を今また心新たに
受け止め精進していかなければと思っ
ております。

(ま)